



Archaeological Laboratory, Co., Ltd.

アルカ通信

ARUKA Newsletter

NO.156
2016.9.1

*考古学研究所(株)アルカは石器と縄文土器・土製品等の実測・整理・分析を強力にバックアップする企業です。

加曾利B式土器

— E.S. モースと坪井正五郎のはざまで —

鈴木 正博

● 第11回 ● 「椎塚形」とモースの土器区分

前回の「高杯形」に続いて「土器ノ形状」として「**椎塚形**」に学ぶ。学びの関心は二つあり、一つはその命名法である「適当なるナル名称ナキヲ以テ所出地ノ名ヲ取りテ仮ニ之ヲ椎塚形ト命ジタリ。」という、比較形態学における「所出地ノ名」を冠する作法の登場である。

もう一つは加曾利B式研究における「椎塚形」の意義である。実態として第11図12の土器を参照するならば、報告では「未他二類例ヲ見ズ」と断言すると共に大森貝塚の「第1版第8図」に形状の共通性を観る。坪井正五郎の「**類似の形態連繫論**」を適用した上で新たに相互の異質性に着目する視点は極めて斬新である。この視点を契機として改めて加曾利B式研究に従えば、モースから坪井正五郎へ批判的に展開される先史考古学の方法発達史が理解できる。

加曾利B式研究に果たす椎塚貝塚の役割は、発掘調査史における一里塚にとどまらず、注目すべきは先史考古学の方法史として**発掘調査により得られた特定2遺蹟間資料の比較形態学を高度化した**点にある。既に佐々木忠次郎・飯島魁両氏による陸平貝塚と大森貝塚との比較形態学による年代区分(「**相異の土器区分論**」)が学史的に著名であるが、**高度化とは椎塚貝塚と大森貝塚との「類似の形態連繫論」**を検証し、更にこの2遺蹟間土器群の相互の内部組成構造までを新たな比較分析視点とし、大森貝塚との「**相異の形態位相論**」(一部は第8・10回で触れているが、大森貝塚と陸平貝塚の

「相異の土器区分論」に対して、大森貝塚と椎塚貝塚では共通する土器への注視に加えて、更に内部組成に顕著な相異を導出する手続きを「相異の形態位相論」と呼ぶ)の成果に与えた評価である。

この成果は恐らく坪井正五郎による指導の賜物で、椎塚貝塚の「相異の形態位相論」、特に「土器ノ形状」においては「**椎塚形**」なる命名法に直面するや直ぐに望むべく**理論考古学**として「**優生学**」を応用、西ヶ原貝塚に「**西ヶ原第一様式**」から「**西ヶ原第六様式**」までの組成を導出した「**土器様式名称**」を構想するも、単なる理論に終始する自己嫌悪も加わり、(未完)のまま警告とする。

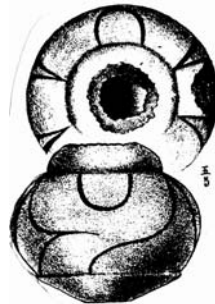
では、大森貝塚には「椎塚形」のように他に例を観ない土器は存在しないのであろうか、否、ここで浮上するのが、モースが大森貝塚の土器(第14図)に対して「この土器は、**大森貝塚発見の他のどの土器にも似ていないから、多分、時期の違うものだろう。**」(岩波文庫訳:ゴチック体は引用者)と明確に異質性を解説した定性的相異の問題である。モースは大森貝塚の土師器甕をパスする一方、第14図の異質な形態には明確に注意を促しており、佐原真と小林達雄も共にモースの観察眼には着目するが、椎塚貝塚における

「椎塚形」の意義は不問とする。

そこで観察眼への着目をより高度化し先史考古学の方法発達史へと昇華するならば、その異質性を「**時期の違うもの**」と判断するモースの形態学には土器区分による年代区分という方法的な課題が生成される。しかもこの「**時期の違うもの**」という形態学を根拠とした判断は、モースの弟子である佐々木忠次郎・飯島魁両氏が陸平貝塚の和文/英文報告で継承し、大森貝塚と比較して陸平貝塚の土器は「**文飾繁縟**」、「**文飾精巧**」、そして第一に挙げるべき特徴として「**一般的に厚く**」、「**デザインは多く巧妙**」と訴求し、学史的な年代区分である「**相異の土器区分論**」に至る。

そして新発見の椎塚貝塚でも大森貝塚と同様に、**類似する文様の異質な形状**を「**椎塚形**」として抽出すると共に、**層位的な所見**からはモースの「**時期の違うもの**」という年代区分としての判断を否定し、新たな評価として相異を形状類推から切り離して別名化し、他遺蹟との関係に検討を委ねるべく「**類似の形態連繫論**」の適用を前提とした「**相異の形態位相論**」を導出する。

こうして大森貝塚→陸平貝塚→西ヶ原貝塚/椎塚貝塚へと継承される比較形態学の展開は、年代区分・層位・相互の形態位相における方法的進展が顕著であり、畢竟、**加曾利B式研究を知らずして日本考古学の方法発達史を語ることなかれ**、と次には椎塚貝塚における「**相異の形態位相論**」の俯瞰が要請される。



▲第14図
大森貝塚の「時期が違うもの」

※巻頭連載は隔月です。次回は再び神村先生です。

目次

■加曾利B式土器 「**椎塚形**」とモースの土器区分(第11回) 鈴木正博 …1
■考古学の履歴書 こののはじまり(第4回) 間壁忠彦・間壁霞子 …2

■リレーエッセイ マイ・フェイバレット・サイト(第149回) 宇留野主税 …2
■考古学者の書棚 『日本の土 地質学が明かす黒土と縄文文化-』小林竜太 …4

考古学の履歴書

ことのはじまりー「..それでは 何だ」(第4回) 間壁 忠彦・間壁 葎子

3. 製塩土器への注目(その2)

わが国における古代の塩生産は、土器製塩だということを明らかにし、その研究を中心となって全国的に進めたのが、岡山大学の故近藤義郎氏であったこと、またその発端が瀬戸内海の小島「喜兵衛島」ということだったとされるのも、いまや学史上の事実となっているだろう。

ただこの喜兵衛島調査での第一報とも言うべき報告は、「謎の師楽式」『歴史評論』72号(1956年1月)で、著者名は喜兵衛島発掘調査団である。喜兵衛島の最初の基本的な発掘調査は1954年の春と夏の二度にわたった。この報告内には近藤氏自身が、自分は瀬戸内の無人島とも言える0.2平方kmの小島の喜兵衛島に、15基もの後期古墳が群集している事に注目したが、この島を紹介・案内した玉野市在住の杉野文一氏は、最初から師楽式土器を注目していた、と書かれている。

実は私(葎子)も、この報告にはかなりな部分で加わっていた。というのも1954年12月、当時の岡山大学の卒論提出が、10日だったか、20日だったか忘れてたが、ともかくコピー機のない時代、手もとに残る手書きの控えの日付けは12月6日、その卒論タイトルは「師楽式文化をめぐる諸問題」という大仰なもの。400字詰め原稿用紙213枚、他に青写真による遺跡分布図・各遺跡の土器図のコピーとか、土器の拓本を貼り付けた図、遺跡地名表などの30点ばかりを、別に挿入した卒業論文を提出していたのである。

「謎の師楽式」が出版されたのは、其の時より丁度丸1年後にあたり、報告製作の主なメンバー6名中に、旧姓の私の名前も見える。たしかに報告中の師楽式土器に関する図は、卒論の中で使用した図から作製したもの、師楽遺跡の分布図等は卒論内に使用したものが基本になっている。また「註」部分については、近藤氏もわざわざ断って「西川宏、武田葎子、近藤義郎が主として分担作成した」とある。

いま幾年ぶりにそのページをくってみると、註の中で、長文なものは、まるで卒論の部分部分の要約、とかそのままの内容のようだ。この註は、報文締め切り直前の頃、近藤氏から急遽頼まれ、一晩ほどで卒論控えを参考に、書き上げたようなことを思い出す。

話は少々元に戻るが、先回で述べたように、私は大学3回生の頃から、あちこちの師楽遺跡や、遺物所在地を訪ね歩いていた。先回記した、師楽式遺跡や遺物について最初の記録である『師楽式土器図録』は1939(昭和14)年の刊行で、中心は水原岩太郎・時実黙水・高本恭夫氏らであった。

これによると、水原氏が1923(大正12)年、玉野市田井の浦で特異な土器に気付き田井の浦、甲式・乙式とした。時実黙水氏は、自宅近くの現在は瀬戸内市である牛窓町一帯の浜で特異な土器を発見、特に師楽地区では、集落全体が遺物散布地であり、1929(昭和4)年水原氏らと調査、ここの土器を典型として「師楽式土器」と呼んだ。すでにこれらは古墳時代後期のもので、手作り、遺跡には多くの土器片の外、灰・炭も存在、窯址らしい状況についても指摘されている。

実のところ私自身も、絶対あの師楽式土器を解明してやろうなどというっぺ心がけではなかった。ただ何に使われたのか、海岸で、大量の不用品を作るはずは無い、という事が、何時も心に刺さっていたといえる。そのため時間があれば、遺跡地を探

し、あの『図録』に記載された遺物の多くが、収蔵されていた、吉備考古館を訪れ、資料のごく一部も凶化し、拓本も集めていた。

水原氏は晩年玉野市に在住。同氏が最初に気付いた田井の甲・乙式と名付けた資料は、玉野市在の杉野文一氏の所蔵となっていた。私は杉野氏も尋ねその資料も拝見した。同氏はむしろ旧石器資料収集に熱心で、宮田山遺跡の石器をおおく収集していたが、同氏宅では、あの田井式土器を見ながら、師楽について私の思い分のおしゃべりもした。

児島市在住の、高本恭夫氏も尋ね、同じく児島市在住で、周辺遺跡をくまなく踏査されていた山本慶一氏には、後に瀬戸大橋の橋脚ともなった香川県も含め、周辺一帯の島々の師楽遺跡を教示案内もしていただいた。

こうした中で、卒論に添付した遺跡分布図や遺跡地名表、遺物の拓本も集まったといえる。近藤氏は、1953年に杉野氏の案内で喜兵衛島に最初に訪れたと書かれているので、丁度私が資料を見て廻っていた頃と、同じともいえる。

喜兵衛島の発掘が始まったのは1954年3月、この時は古墳調査が中心だったが、古墳内から師楽式土器の完形品が発見されている。この事実を知って、私は近藤氏に直接頼んで、次回の当年夏の発掘に、いわば押しかけ参加をしたのである。

其の時は、主に古墳の発掘を手伝う事になったが、海浜で師楽式土器と呼んできた器形の違う土器の、層位関係が明らかになった事は、私が表面採集では確認できなかった事の確認となった。また当時岡大3回生だった岡本明朗氏は、これは製塩土器ではと主張した。私は卒論の事もあり、海浜での生産に関わる土器、それはいわゆる海部とも関わることと考え、各方面の事を模索していた時だ。すでに石川県では、1953年発行の『石川県考古学研究会会誌』第5号にも沼田啓太郎氏による、石川県の尖底土器で製塩が考えられてもいた。

謄写版刷り1955年6月発行の『遺跡』22号は、学生考古学会会員で1954年度卒業生の文集。この中で私は、卒論のレジメのような物を書いているが、それは師楽式土器が製塩関係に利用する土器であっても、何故大量の小形土器なのか、もっと大形品が幾らでも作れる時代であるのに、という疑問がつきまとっていた、と書いている。「謎の師楽式」では、私の疑問は問題にされなかった。

間壁忠彦 略歴	間壁葎子 略歴
1932年 岡山県児島郡甲浦村(現岡山市南区)郡に生まれる	1932年 岡山市門田屋敷(現岡山市中区)に生まれる
1951年 岡山県立操山高等学校卒業	1951年 岡山県立操山高等学校卒業
1955年 岡山大学法文学部法学科卒業	1955年 岡山大学法文学部史学科(日本史専攻)卒業
1954~1973年 (財)倉敷考古館学芸員	1955年 岡山大学法文学部副手(池田家文書整理)
1973~2006年 同上館長	1956~2015年 (財)倉敷考古館学芸員
1968~1998年 広島大学、1968~1980岡山大学非常勤講師(博物館学)、他に熊本・九州・愛媛・鳥取・千葉大学へ博物館学非常勤講師出講	1979~1986年 中国女子短期大学非常勤講師(歴史学)
1982~2005年 就実女子大学非常勤講師(考古学)、ほかに島根大学へ考古学非常勤講師出講	1985~2004年 神戸女子大学非常勤講師1年を経て助教授(1991年まで)教授(2004年まで)、以後同大学名誉教授
2006~2015年 (財)倉敷考古館学術顧問	1995年 明治大学で論文博士(歴史学)

隔月連載です。次回は岡田淳子先生です。

Jレーエッセイ

マイ・フェイバレット・サイト 149

史跡真壁城跡 ～ 茨城県桜川市

宇留野 主税

真壁城跡は茨城県西部にあり、筑波山北麓に築かれた戦国期の城郭である。

真壁城主・真壁氏は平安末期から真壁郡(現・桜川市南半部)を治め、戦国期の永禄年間、真壁久幹の時代に、本丸を中心とする求心構造城郭の真壁城が構築され、現在に至っている(図1)。

平成6年、大学3年生だった私は、東京学芸大学の恩師・木村茂光先生や先輩の内田博明さんに連れられて、国史跡指定にともない開催された真壁城シンポジウムで初めて城跡を訪れた。

大学院修了後、東京都八王子市教育委員会、青森県教育委員会等の臨時職員を経て、平成13年から旧真壁町に入り真壁城跡の発掘調査を担当し、現在に至っている。

今は他県の研究者からも気にかけていただけるようになったが、城郭調査の経験といえば、八王子市の八王子城跡御主殿や神奈川県小田原市の小田原城跡のいずれも整理・報告書のみで、城郭の発掘現場担当は、実はこの真壁城跡が初めてであった。

しかし、真壁城跡の周囲を見渡せば、関連史料や歴史景観、祭礼、伝承、地域共同体の活動等、真壁城の時代から継承された歴史的環境がいくつも保存されており、着任当時は、不安よりも調査成果と周辺の歴史環境を、総合的研究として、どう活かしてゆくか、という期待感が勝っていた。

例えば、代表的なものを挙げると、この地域は平安時代の「平将門の乱」の紛争地だが、現代も続く祭りとして、将門が伯父の平良兼を湯袋峠に追う場面の再現とされる、松明を手に登山する「かたてまつり」(かたて=かりたてる)があ

る。中世では鎌倉～戦国期の中世文書「真壁文書」や、城下町の町割りを残す「真壁の町並み」(重要伝統的建造物群保存地区)、小栗道、鎌倉街道、そして今なお中世城郭に居住されている真壁氏旧臣の子孫など、中世前後の痕跡がいたるところにあふれていた。

さて、真壁城跡周辺の魅力ばかり述べてきたが、真壁城跡の発掘調査については、平成9年度から国庫補助を受けた整備事業として実施している。

真壁城跡は、東西850m、南北400m程の規模で、本丸を中心に二の丸、中城、外曲輪等が囲む求心構造の平城である。本丸には体育館があって当面調査できないため、史跡整備は、城郭の外周、外曲輪から中城、二の丸へと進めている。

外周から中心部へという、一見遠回りの発掘工程であったが、中世城郭が方形居館群から求心構造へと変化する過程を明らかにするなど、城郭構造の変遷について、多くの所見が得られた。

真壁城跡の年代は、出土遺物からみて、概ね15世紀中葉から17世紀初頭で、戦国期を中心にI～VI期の変遷がとらえられた。特に、かわらけは編年の骨格となり、大きさ、製作手法、胎土など、かなり厳密な規格性があることもわかった。

遺構面は大きく分けて2面の盛土整地があり、下層は15世紀末から16世紀中葉の方形居館群、上層は永禄年間頃の求心構造城郭面、それぞれ色調や混合物が特徴的で、盛土の規格性がみられる。

さらに、堀も形態と変遷が明らかで、方形居館は土塁無しの薬研堀、求心構造城郭では土塁付の箱堀、16世紀第4四半期になると土塁付の巨大な薬研堀が出現する。こうした堀

の規格変化は外曲輪、中城でも共通していた。

このように、真壁城跡は、土器、整地土、堀等、厳密な規格が随所にみられるわかりやすい城である。

真壁城跡でとらえた特徴と変化は、他地域でも類例があり、発掘成果が中世城館の年代や構造をとらえる基準資料、あるいは重要な参考資料となるよう、今後も調査研究に努めたい。

※次回のマイ・フェイバレット・サイトは比毛君男さんです。



▲史跡真壁城跡と城下

考古学者の書棚

「日本の土－地質学が明かす黒土と縄文文化－」

山野井徹／築地書館 (2015)

小林 竜太

考古学には、〇〇考古学などの分野がいくつかあるが、本書は私がもっとも関心を寄せる分野のひとつである「ジオアーケオロジー」に関連してオススメしたい。この分野は、考古資料を含むコンテキストに着目する研究領域であり、特に関心を寄せるのは、いつのどのような景観のなかにあったのか、どのような人びとによってどのくらいの期間にわたって関わってきたのか、どのような過程を経て遺物や遺構となっていったのか、などである。こうした視点から研究を進めるため、遺跡を埋没させる覆土や遺構の確認面、さらにその下の基盤層もジオアーケオロジーにとっては分析対象となる。こうした関心から本書のタイトルを見て、すぐさま購入したわけである。

いわゆる「赤土」とよばれるローム質土層は旧石器時代の遺物包含層であり、縄文時代の遺物はクロボク土を代表とする「黒土」と密接に関連して出土することが知られている。旧来、クロボク土とローム質土層はいずれも火山灰土として認識される傾向にあったが、本書のごく序盤で明らかにされることの1つが、実は「火山灰土ではない」ということである。火山灰ではなく、塵芥が集まって少しずつ積み上がってきたのだとすれば、なぜ旧石器時代と異なり縄文時代になって堆積した土だけが「黒い」のか。本書の議論の「肝」はこの点にある。以下、この点に着目して、本書の紹介をしていきたい。

クロボク土の色が黒いのは動植物遺体からもたらされた土壌中の有機物を含むためだと考えられてきた。つまり、降灰後の火山活動が休止している間に土壌化作用が進行し、表層部が黒土となり、土壌化されなかった部分がロームとして残ると考えられていた。しかし、この形成過程にはいくつかの疑問点があるという。まずなぜ縄文時代に降った火山灰だけがクロボク土となるのか。もし縄文時代の始まりが最終氷期の終わりであるため、植物が旺盛に繁っていたと説明するならば、同様に過去の間氷期に形成されたクロボク土がみつかるはずであるが、そうした古いクロボク土はみつかっていないという。また、火山灰を母材とするならば、火山から遠く離れた北陸などにも分厚いクロボク土が数多く存在することを説明できないと指摘する。

これら2つの「土」が火山灰土ではないことは、十和田火山東域における、軽石などを含む明瞭な火山灰層とローム質土・クロボク土層が観察できる複数の露頭から分析される。これらの露頭において、明瞭な火山灰層が火口からの離れるに従って層厚を減じるのに対して、ローム質土層とクロボク土層の厚さは各露頭において異なることが明らかとなる。

火山灰でなければ一体なにか？筆者は「土壌化堆積作用」によってこれを説明する。地表に落ちた生物遺体などの有機物は、土壌生物によって分解されることで土壌化する。この間、生物に取り込まれても分解されない無機物や風成の鉱物粒子などが残留して密度を高め、堆積物としてその場につもっていく。つまり、クロボク土の下位に堆積するローム層は、「黒み」のもととなる有機物がほぼ完全に分解された旧土壌と捉えること

ができるという。だとすれば、なぜ縄文時代の土壌だけが有機物による「黒み」を維持しているのかが焦点となってくる。

まず日本海側の複数地点で観察されたクロボク土最下部の放射性炭素年代測定値は、7000年代前から急に多くなり、3000年代以降は増え方が少なく、1000年よりも新しい箇所はないという結果が示される。つまり、クロボク土形成のきっかけはグローバルな気候変化ではなく、なにかローカルな事象と捉えられるわけである。次に、クロボク土の黒みを維持する要素について分析される。顕微鏡観察によって、クロボク土には多量の「微粒炭」が必ず含まれていることが示され、さらに微粒炭の密度が高いほど腐食の量が多くなることが指摘される。炭はその活性作用によって腐食のような有機物の高分子を吸着することが知られており(例えば「脱臭炭」は臭いのもととなる高分子を吸着する)、黒みの原因が「炭のかけら」であることが明らかとなる。

クロボク土は東北・関東・九州を中心に広大な分布範囲をもち、台地・沿岸・砂丘地・氾濫原などの多様な地形面に普遍的に検出されるため、土器の焼成や食物の料理といった火の使用だけでは、多量の微粒炭混入は説明できないという。もっと大規模な、自然発火による山火事や人為的火入れによる野焼き・山焼きなどが想定されるわけである。しかも、分厚いクロボク土層の発達には、その火事が一時的ではなくて継続的でなければならず、人為的火入れが示唆される。

筆者は、野焼き・山焼きを繰り返したのは、狩猟採集のための疎林と「住み場」を確保・維持するためではないかと推論する。周知の通り、縄文時代は気候が温暖・湿潤化し、森林環境が拡大した時期であり、狩猟具の変化もこれを支持している。そのため、自然のままでは台地や丘陵部は原生林に覆われてしまうが、森の一部に火入れをすることで、「住み場」の近くに疎林を出現させ、そこから山菜や根菜類などの多様な植物食資源をえて「食」の安定をもたらすことができるという。これは定期的に火入れを繰り返すだけの単純な資源管理であるが、多様な資源利用を特徴とする旧来の縄文人像に、エコトーン(環境遷移帯)を「作り出す」人びとという新たな側面を付加する非常に興味深い仮説である。もちろん、縄文時代集落の存続期間と、その周辺のクロボク土の形成期間が一致するかについては、年代測定などによる直接的な証拠が必要となる。本書の内容は、通常の発掘調査では分析対象に含まれない集落域の外側に分布するクロボク土に対して、新たな研究視点を提供してくれるだろう。

アルカ通信 No.156

発行日 2016年9月1日
 企画 角張淳一(故人)
 発行 考古学研究所(株)アルカ
 〒384-0801 長野県小諸市甲49-15
 TEL 0267-25-0299
 aruka@aruka.co.jp URL : http://www.aruka.co.jp